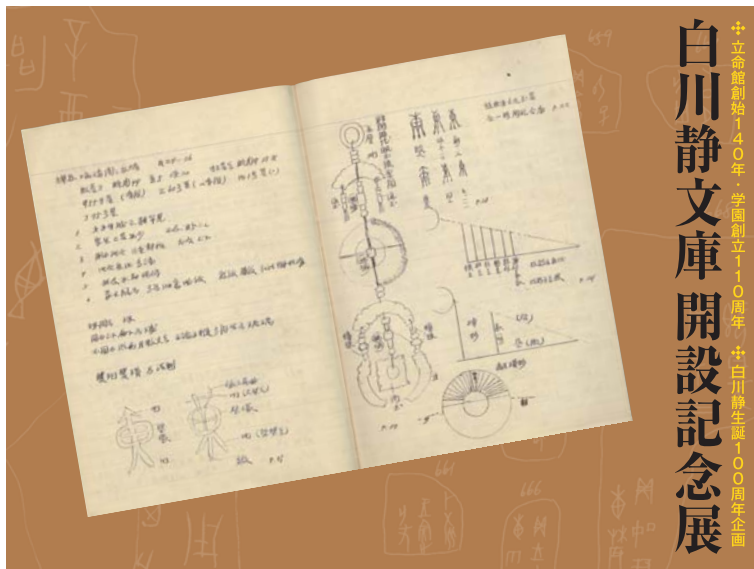


# 白川研究 環便り



## 白川静文庫開設記念展

立命館創始140年・学園創立110周年・中白川静主誕100周年企画

白川静文庫開設記念展パンフレット  
(2010年5月10日～6月24日 立命館大学衣笠図書館)

## 目次 ◆ index

今年度の事業状況

研究所長 加地 伸行

2

白川静文庫の開設と

『白川静文庫目録』の完成

副研究所長 芳村 弘道

3

特殊講義「白川学の世界」の開講について

運営委員 萩原 正樹

6

『京都太秦物語』制作談

白川文字学研究者 榎大地の創造

立命館大学映像学部准教授 富田 美香

7

『京都太秦物語』と白川学

研究員 高島 敏夫

9

二〇〇九年度 文化事業活動報告

文化事業担当 久保 裕之

11

二〇〇九年度 学術活動報告

副研究所長 芳村 弘道

15

編集後記

芳村 弘道

16

第5号

発行

10.6.6

立命館大学  
白川静記念東洋文字文化研究所

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

電話 075-466-3470

Mail toyomoji@st.ritsumei.ac.jp

URL http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/

K-rsc/sio/index.html

## 今年度の事業状況

加地 伸行

本研究所は、今年度、一つの節目を迎えた。すなわち、四月九日、故白川静名誉所長（立命館大学名誉教授）生誕百周年を迎えた。

この百周年を記念して、昨年度に五事業を企画し、今年度それぞれを実現しつつある。

まず第一は、展示である。これは立命館大学図書館と本研究所との共同企画である。白川先生御遺族の御好意で立命館大学に寄贈された白川先生所蔵遺品の内、蔵書が整理され、本年四月三十日付、立命館大学図書館編集・発行の下、『立命館大学図書館蔵 白川静文庫目録』が公表された。なお、白川先生は御生前に本研究所開設時（二〇〇五年六月）に約一千冊の蔵書等をすでに寄贈しておられ、それを研究所が保管してきたが、目録にはそれをも含んでいる。この目録刊行を記念して白川静文庫開設記念展が五月十日から六月二十四日まで同図書館一階展示コーナーにおいて開催されるので、本研究所はその一角に白川静コーナーを設けて関係内容を展示した。

第二は、本研究所の存在を対外的に認知せしめること、また、一般人の漢字に対する関心を高めること等の目的を持って、創作漢字コンテストを産経新聞社と共催で挙行了。五、九七一字の応募があり、盛況裏に審査を終え、白川賞としての最優秀賞を乗原聰（有田市）・永井裕子（川西市・金蘭千里中学校二年生）両氏に贈った。その他に優秀賞十名、佳

作四十名、敢闘賞三名、計六一名を表彰した。その詳細（入選漢字や審査講評等）は、五月十六日付産経新聞朝刊に報告されている。

本研究所としては、所長が審査委員長として事に当たった。審査員は、作詞家の秋元康、下中美都・平凡社編集局長、秋山哲治・Z会事業本部長、産経新聞社側からは編集局長・文化部長・専門（国語担当）編集委員各氏で構成し、Z会・トンボ鉛筆・平凡社の絶大な後援を得た。研究所として、改めて関係各社各位に深甚の感謝の意を表し申し上げる。

なお、この創作漢字コンテストの反響が大きく、非常に好評であったので、来年、第二回を開催する予定である。

第三は、六月六日、立命館のホームカミングデーに合わせた記念フォーラムである。

第一部は、白川賞の授賞式である。今回すなわち第四回の立命館白川静記念東洋文字文化賞（略称は白川賞）教育普及賞は、久米雅雄氏（大阪芸術大学客員教授）に、同奨励賞は、岡墻裕剛氏（北海道大学大学院文学研究科専門研究員）にそれぞれ贈呈する。

第二部は、松岡正剛氏の講演、演題は「私の中の白川静」である。松岡氏は一昨年に『白川静』（平凡新書・平凡社）を刊行し、驚くべき部数を伸ばし続けている。

第三部は、座談会「白川静を語る」と題する座談会で、松岡正剛、沈慶昊（韓国・高麗大学教授、第一回「立命館白川静記念東洋文字文化賞」受賞者）、白川先生の弟子として歴史学から谷口義介（摂南大学教授）、文字学から、高島敏夫（本研究所研究員）、執筆協力者として津崎幸博各氏である。司会は所長である。

記念事業の第四は、本研究所編『白川学入門講座』全三巻（第一巻は文字、第二巻は文学、第三巻は思想・歴史）の出版（平凡社）である。目下、綿密な校正の作業中で、この三巻は、研究所叢書として九月に刊行を予定している。

**特別賞** Z部門

襲 烈 颯 嵐 室

**優秀賞** A部門

井 零 餅 婁 囿

和歌山、奈良(50)、学習塾経営▽兵庫、永井裕子(14)、金蘭千里中学3年

# 智

最優秀賞

## 「今」を映し 未来へ残す

### 広がる夢 ■ 第1回 創作漢字コンテスト

第五は、研究所による「漢字指導士」「漢字教育士」の資格認定事業である。この資格に必要な講義等を、今年度四月から、立命館大学文学部ならびに放送大学大阪学習センターにおいて開講した。やがて、漢字指導士、漢字教育士が誕生するであろう。

この資格認定の為の講義をインターネットにおいて開講すべく、目下、その実施に向けて審議・検討中である。

**敢闘賞** 龜 どだいとす オーストラリア、ジョン・パートレット(8)

蝨 うちわ 福井、森谷夏実(7)

蕨 しらかわしずか 福井、渡邊敬人(12)

産経新聞 平成22年(2010年)5月16日 日曜日

## 『白川静文庫の開設と 白川静文庫目録』の完成

芳村 弘道

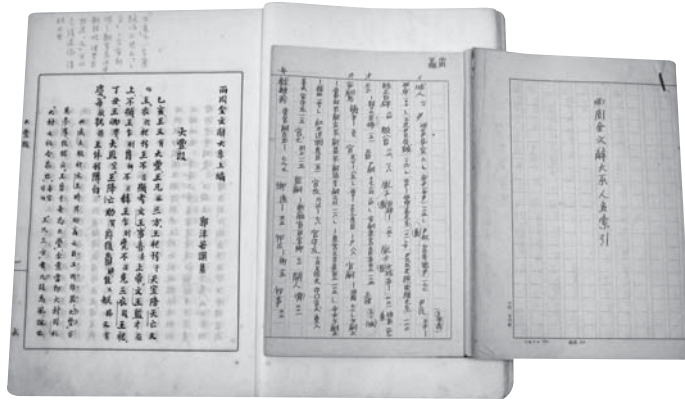
二〇〇五年六月に白川静先生の基金によって当研究所が設立された際、白川先生は研究所に『皇清経解』『甲骨文集』『殷周金文集成』等の御蔵書や資料・原稿類の一部も寄贈されたが、さらに蔵書のおおかたを移されて、ゆくゆくはここを研究の場として整備されるお考えであった。残念ながら、この御計画は実現されず十月に仙逝されたが、御遺志を継がれた白川家の御盛意をもって、二〇〇八年に御遺蔵書等が挙げて本学に寄贈され、二年の歳月をかけて整理を終え、このたびようやく「白川静文庫」が衣笠キャンパス図書館五階に開設された。また『白川静文庫目録』が発刊された。



この目録には白川先生御生前の当研究所への寄贈本も併せて収録し、その数、和書六〇八八点、中国書三九一四点、洋書四六六、逐次刊行物四七四〇点、漢籍古書一七八二点、抜刷り八八六六、諸資料（白川先生御手稿・自筆ノートなど）二二六六、すべて一七、六九二点に及ぶ。筆者は漢籍古書と諸資料の整理・目録作成にたずさわる機会に恵まれた。そこで「白川静文庫」の膨大な所蔵から、漢籍古書と諸資料の中で特に

印象にのこった幾点かを以下に紹介したい。

先生の少壮時代は、あたかも殷墟から甲骨文字が発見されて、その研究が進展する時期に当たっていた。また殷・周青銅器の銘文（金文）研究も盛んになって来た時代であった。先生は、こうした資料を用いて「白川文字学」を開拓された。いわば最古にして最新の研究資料を駆使して学問を行われたのである。「白川静文庫」の漢籍古書には、二四部の甲骨研究書が収蔵され、甲骨学の草分けの学者である羅振玉の編した「殷商貞卜文字考」（宣統二年一九一〇刊）や「殷虚書契後編」（民国

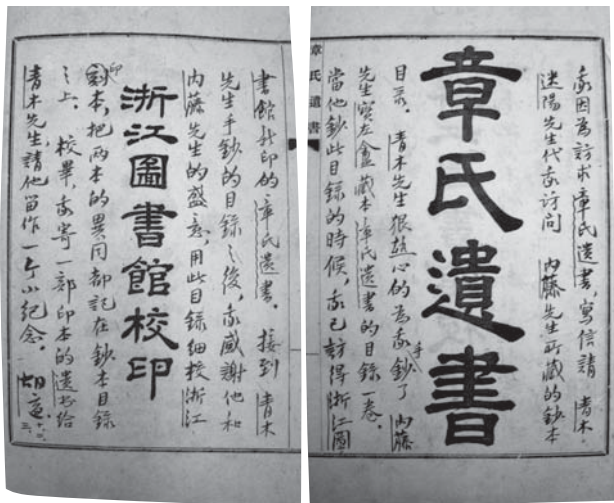


両周金文辞大系と白川先生自筆「索引」

五年一九一六刊）など、現在ではその原刊本が得難いものがある。なお楊樹達『耐林廬甲文説』（一九五四刊）、胡厚宣『戦後京津新獲甲骨集』（一九五四刊）、嚴一萍『甲骨綴合新編』（一九七五刊）など中国の研究

者からの贈呈本があつて、学术交流が窺われる。金文学一九部の書籍には、先生が精読されて批注を加えられた郭沫若の『両周金文辞大系』（昭和十年一九三五、東京刊）が目を引き。甲骨・金文学書とともに注目すべきは、『説文解字』関連の文字学の書籍（経部小学類・叢部経叢類）である。先生が古代文字に興味を抱かれる契機となった呉大澂『説文古籀補』（光緒十二年一八八六刊）がここに見いだされる。また『苗氏説文四種』（咸豐元年一八五一刊、同治六年一八六七修訂）所収の『毛詩吟訂』は手批が加わっており、先生の詩経学の一端を知る好資料となる。

先生は稀本珍籍を求める蔵書家ではなかった。それゆえ当文庫の漢籍古書には、文物的価値・学術的価値の両面を備えた所謂「善本」と見なしうる蔵本は多くないが、日中学术交流史上に極めて重要な一本を蔵せ

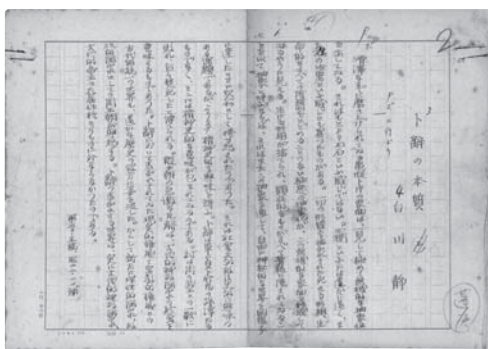


章氏遺書

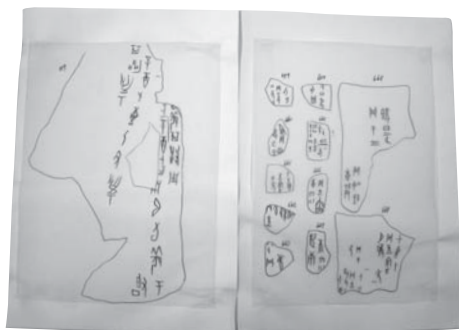


られていた。それは中国に文学革命を起こしたことで名高い胡適が青木正児博士に贈呈した清の章学誠の全集『章氏遺書』（浙江図書館、民国九年一九二〇活版本）である。内藤湖南所蔵の稿本『章氏遺書』（関西大学現蔵）の価値を知った胡適が青木博士に内藤本目録の抄録を依頼し、これに応じた青木博士に記念として、胡適が内藤本との校異を新印の浙江図書館版に録した贈呈本である。扉に胡適が民国十年（一九二一）二月三日に墨書した献呈の辞が十行にわたって記されている。この貴重本は今回の整理中に見出したもので、御生前にこの所蔵について聞く機会を得なかった。青木博士は晩年、本学に在職され、昭和三十九年末、大学院の講義を終えて倒れられた。白川先生は「その属續のときに居合わせる縁をもった」と「蘆北先生遺事」（著作集巻十二、頁四三八）に述べておられるので、ご存命中に博士から、もしくはご逝去後に御遺族から受贈せられたものかと想像する。

白川先生の手稿・ノート類は、いずれも「白川学」の形成過程を直接知るに足る資料群といえよう。中でも初めて学問を世に示された論文「卜



卜辞の本質



『殷虚卜辞』の白川先生自筆トレース



オープニングセレモニーで挨拶する加地所長



オープニングセレモニーの様子

辞の本質」の原稿がのこされている。先生は数万の甲骨片を書写されたが、自ら装丁して研究資料とされたものに、カナダの漢学者、明義士（James M. Menzies）編『殷虚卜辞』のトレース集がある。ノート類には、戦前の筆記と推測されるものとして『古事記』『日本書紀』を言語面から整理されたものがあり、後年の『字訓』などに結実する国語学的研究の基礎を早くになしておられたことを知る。戦後のものには、宋の洪邁『容齋隨筆』の読書札記があり、先生の広範な読書の跡を伝えている。

このように書籍の内容をノートにとって研究資料になさったほか、先生は読書の過程において書き入れをされたり、要所にチェックを加えられたりすることも多かった。文庫収蔵の膨大な数の和書・中国書、内外の雑誌にはこうした跡が見られ、「白川学」の研究の重要な資料として将来にわたって永く活用されることになろう。

なお「白川静文庫」開設を記念する展示が衣笠キャンパス図書館の一階で五月十日から六月二十四日まで開催される。

## 特殊講義「白川学の世界」の 開講について

萩原 正樹

二〇〇九年度前期より、一般教育特殊講義「白川学の世界」が開講された。この講義は、立命館大学衣笠キャンパスに通う文学部、法学部、産業社会学部、国際関係学部、映像学部の学生に広く開かれた一般教育科目であり、学生諸君に白川先生の学問の概要を学んでもらうことを目的としている。

白川静先生のお名前は、立命館大学に入学した学生にはよく知られている。しかしながら、「白川学」と総称されるその学問については、残念ながら少数の熱心な学生を除いて、あまり理解されていないのが現状であろう。「白川学」は難解であり、白川先生が一般向きに書かれた書物を読んでみてもよく理解できないという学生も多いのである。

そこで、学生諸君に「白川学」の概要と、その独自の着想や資料理解、旧来の学説との相違点、また「白川学」の現代的な意義などについて学んでもらうべく、本講義を開講することとなった。また学問とともに白川先生の生涯を紹介することによって、偉大な先輩の、学問研究にかける気概や批判的精神を知り、さらにさまざまなエピソードを通して戦前から戦後にかけての立命館の歩みについて理解してもらおうことも本講義の目的となっている。

講義は、文学部中国文学専攻の専任教員がコーディネーターとなり、白川静先生に親しく教えを受け、各分野の研究において活躍されている複数の先生方に御担当頂いた。二〇〇九年度の授業内容と御担当は下記

の通りであった。

- 第1回 オリエンテーション（白川静の生涯と立命館大学）（萩原正樹）
  - 第2回 白川静と古典研究（芳村弘道）
  - 第3回 詩経と西周時代1（谷口義介）
  - 第4回 詩経と西周時代2（谷口義介）
  - 第5回 中国の神話（阪谷昭弘）
  - 第6回 屈原と楚辞（今場正美）
  - 第7回 白川静の古代文学論（今場正美）
  - 第8回 古代歌謡の世界、詩経と万葉集（真下厚）
  - 第9回 孔子と古代思想1（石井真美子）
  - 第10回 孔子と古代思想2（石井真美子）
  - 第11回 詩経研究から文字学へ（高島敏夫）
  - 第12回 殷代社会と日本古代社会（高島敏夫）
  - 第13回 白川文字学の体系（高島敏夫）
  - 第14回 中国からみた白川文字学（張莉）
- （新型インフルエンザによる臨時休校のため、二〇〇九年度は計十四回の講義であった）

二〇〇九年度の講義登録者は各学部から計五十一名、毎回熱心に受講し、講義後に質問に来る学生も多く、学生諸君の「白川学」への関心の高さをあらためて感じた。学生諸君には最後にレポートを課して評価を行ったが、その多くのレポートから、白川先生の書物を読んで懸命にその学問を理解しようという姿勢を読み取ることができ、初めての試みながら本講義が一定の成果を挙げたことを確信した次第である。

今年度も既に講義が始まり、昨年度とほぼ同じ規模の学生が受講している。なお今年度は、本講義を大学コンソーシアム京都の開講科目としても提供しており、他大学からの受講生も受け入れている。

# 『京都太秦物語』制作談 白川文字学研究者 榎大地の創造

立命館大学映像学部准教授 富田 美香

今年の一、白川静記念東洋文字文化研究所の協力をいただいて、一本の劇映画『京都太秦物語』が生まれた。

この作品は、松竹株式会社と本学との産学連携教育の試みの一つとして、松竹の映画人と学生が映像学部の授業で共同制作した九十分の劇場用映画である。本学客員教授の山田洋次監督と、山田監督の助監督を長年務められた阿部勉監督とが共同で監督し、京都・太秦の商店街に住むヒロイン・京子の恋物語を描いている。その京子の心情を強引な愛情表現で大きく揺さぶる男性が、白川文字学の若手研究者、<sup>えのきだち</sup>榎大地である。榎大地は、本作が恋物語として成立するか否かの鍵を握る重要な人物であり、その人物を創造するにあたって、本研究所以と文学部中国文学専攻の全面的な協力をいただいた。五月のMOVIX京都での本作公開を機に、榎大地の創造に協力下さった方々へのお礼と完成報告にかえて、本作の試みと榎大地の誕生譚を紹介したい。

## 制作経緯と目的

本作の構想は、山田監督が『たそがれ清兵衛』（二〇〇二年、松竹）を太秦の撮影所で撮っていた時から、撮影所近くの大映通り商店街の人々に魅かれてあたためていたものである。その内容は、J・ジョイス

の『ダブリン市民』の「イブリン」を、商店街に生まれ育った娘に置き換えて、自身の町での生活と、別世界の男性との愛、という人生の岐路に立った娘の葛藤を描くものである。作品の基盤には地域と人々の生活があり、その魅力が娘の葛藤の要因となることから、商店街の魅力をドキュメンタリー的に捉えることが重要なコンセプトとなった。

この構想に本学が参画するきっかけは、映像系新学部（現映像学部）の設置に際して、山田監督がアドバイザーに就任して下さった二〇〇五年に遡る。当時、新学部の映画領域を準備していた筆者は、山田監督に、「撮影所が学校だった、という真髓を教えてください」とお願いし、それを教える。山田塾を聞いてほしい。できればそこで映画作りを、大映通りのあの恋物語を……と無責任極まりない夢想を話した。二年後に山田監督は、「映画を作らないと、本当に大事なことは教えられない」と仰つて、山田塾での映画作りを決意して下さったのである。

山田監督の「本当に大事なこと」とは、「人を学ぶことである。人と向き合い、人生を学ぶことは、人を創るドラマの原点であり、自らを創るという普遍的なテーマでもある。映画『京都太秦物語』を作る大きな目的はそこにあり、学生たちは、一年間かけて商店街の各店舗の家庭に入り、生活を取材し、家族同様のつきあひを通して、シナリオを書き、翌二〇〇九年度には再びシナリオとロケ地調査を行い、二ヶ月間もの撮影を通して、太秦の京子のドラマを作り上げていったのである。

## 大地の誕生と創造

当初、京子を振り回す別世界の男性は、エリート・サラリーマンであったが、二〇〇八年度のシナリオ執筆中に、学生達によって大地と名づけられ、行動的な大人の写真家へと変貌した。学生達は、山田監督から「君たちは身を焦がすような熱い恋をしたことがないのかい」と問われなが





大地のラブレターを用意する学生スタッフ ©松竹株式会社

ら、京子と大地の出会い、逢瀬、別れを、市内の名所や大地の部屋、太秦、京都駅を舞台に何十パターンも創造した。試行錯誤の結果、二〇〇九年度の四月に山田監督の英断で、京子はクリーニング屋の娘で大学図書館に勤務する司書へと変貌し、大地は図書館で出会う堅物の研究者に姿を変えた。大地が白川文字学の研究者に決まった理由は、白川静文庫の存在と、白川先生に対する山田監督の深い敬意からである。監督は、朝日賞受

の重厚感と、高島先生と院生・学生さんのリアリティによって、白川文字学一筋に生きてきた大地という架空の男の日々を非常にリアルに物語るシーンとなり、本作の恋物語としての説得力と魅力を増している。

本作は、白川静先生をはじめ、生活を営む人々、そして映画へのオマージュが込められた愛らしい映画に仕上がった。本作を通して多くの方に、その魅力と学生達の成長を感じ取っていただければ幸いです。



研究室の榎大地(田中壮太郎氏) ©松竹株式会社

賞式で白川先生ご夫妻と同席された際の会話から、ご夫婦の肉情的な魅力を強く感じられたことをしばしば笑顔で語られた。その大地役は、山田監督の指名で俳優の田中壮太郎氏に決まった。山田監督は、田中氏がノーベル物理学者の朝永振一郎博士を演じた舞台「東京原子核クラブ」をご覧になっており、「彼なら大地を演じられる」と確信をもって仰った。

この大地を創造するために、本研究所と中国文学専攻に協力をおおぎ、白川文字学の特徴、白川先生のお人柄、白川先生の研究の仕方、若手研究者の生活などを何度もヒアリングさせていただいた。とりわけ高島敏夫先生には、大地の研究発表シーンの参考として白川学講義の撮影や、大地が借りる文献資料や万年筆のアドバイス、白川文字学の監修、大地の指導教授としての講義出演まで、全面的なご協力をいただいた。中国文学専攻からは、授業期間中にもかかわらず、共同研究室を大地の研究室としてお借りし、院生・学生さんにもエキストラ出演をお願いして、設営・撮影を行った。この研究室のシーンは、古書籍に囲まれた研究室

この作品は松竹と立命館大学  
そして長い映画の歴史を誇る  
京都太秦商店街の人たちが  
映画再興の熱い思いを込めて描く  
ラブストーリーです  
山田洋次

世界が絶賛！山田洋次監督が22人の学生とともに作り上げた、  
映画の街・京都太秦を舞台にした人と人のつながりを描く物語。

山田洋次監督が、専任教員を務める立命館大学映画学部の学生22名と山田監督スタッフとともに製作した「京都太秦物語」は、学生が活躍した映画プロジェクトとして専攻から注目されていた本作では、無名無名の立命館大学のメンバーにも、田中壮太郎氏といった俳優陣に加え、実際の丸太通り商店街の人々や立命館大学の人も出演。劇中にはインタビュー映像も挿入され、ドキュメンタリータッチが印象的な本作は、映画に専攻する学生の自覚と意識の高まりが窺いあふれるとともに、ストーリーに厚みがあります。毎年の恒例イベントから卒業生に高く、第6回ペルリン国際映画祭では、上映会の特典が実現し、急遽追加上映が決定。上映には、監督、キャストと喜びあふれた学生スタッフに、敬愛から大きな拍手が送られました。その後も各地の国際映画祭では、この傑作と作品のオファーを受け、世界からの評価はますます高まっています。

「私は、この街を去るのだろうか。」

京都太秦、丸太通り商店街、クリーニング店の娘、東京女子(後者藤原はな)は、立命館大学の図書館に勤めている。彼女と大地(田中壮太郎)は京都府の京子で、アルバイトをしながらお笑い芸人を目指している。

ある日、京子は京都府立白河女子学を卒業する大地(山田洋次)と出会う。学園一帯の大地は京子に一目惚れしてしまい、一途な情熱を京子に注ぎこめる。一方、大地は自分の将来について悩み、京子との関係もうまくいかない。大地は京子に、京都を出て京子先の北山に家ではほしいと一方に告白する。京都府のオファーを受け、京子は、京都府に何かがあったと決断して……。

©白川静 (1970-2008)  
京都府立白河女子学、立命館大学を卒業。その研究は「白河女子学」といわれるほど定着。中国現代史、中国文学専攻と専攻にわたり、漢学や漢学専攻で研究し、歴史的・学術的な研究も数多く行った。享年が80歳となる。

京都府・山田洋次 原案  
出演 藤原はな USA (EXILE) 田中壮太郎 西田典孝 北山雅博 若山トモズ 阿部ササヲ 田中 崇 山田洋次 櫻井いづみ 原菜 山田洋次 製作 山田洋次 野田高梧 / プロデューサー 山本一樹 / 脚本 山田洋次 田中壮太郎 / 監督 山田洋次  
監修 山本一樹 / 撮影 森村隆夫 / 助監督 土山正之 / 音楽 斎藤雅夫 / 監製 藤原はな / 京都府立白河女子学 / 京都府立白河女子学 / 立命館大学 / 立命館大学映画学専攻  
製作 京都府 立命館大学 松竹映画制作 丸太通り商店街  
製作 学校法人 立命館 松竹株式会社 製作 監修 松竹株式会社

京都府・山田洋次 原案  
出演 藤原はな USA (EXILE) 田中壮太郎 西田典孝 北山雅博 若山トモズ 阿部ササヲ 田中 崇 山田洋次 櫻井いづみ 原菜 山田洋次 製作 山田洋次 野田高梧 / プロデューサー 山本一樹 / 脚本 山田洋次 田中壮太郎 / 監督 山田洋次  
監修 山本一樹 / 撮影 森村隆夫 / 助監督 土山正之 / 音楽 斎藤雅夫 / 監製 藤原はな / 京都府立白河女子学 / 京都府立白河女子学 / 立命館大学 / 立命館大学映画学専攻  
製作 京都府 立命館大学 松竹映画制作 丸太通り商店街  
製作 学校法人 立命館 松竹株式会社 製作 監修 松竹株式会社

©松竹株式会社



## 『京都太秦物語』と白川学

高島 敏夫

去る一月三十一日、京都MOVIXシアター12で『京都太秦物語』（五月二十二日公開）の試写会が行なわれた。開館時間に合わせて行ったのだが、館内はすでにほぼ満員になっていて少々焦ってしまっただけの大賑わいであった。この映画にはこんなにも多くの人が関わっていたのかと驚いた。知り合いを探す余裕もなく、空席をやつとのことで見つけて一息ついた。

制作過程に少しかかわった関係でストーリーは一応頭に入っていたし、ごく一部分ではあるが撮影場面にも加わっていたので、作品の世界を漠然と想像しながら幕の開くのを待っていた。だが、シナリオから想像していたものとは全く別世界のような画面が、のっけから動き始めた。そのことに驚いたものだから、シナリオの記憶などもはやどこかへ飛んで行く始末。あのシナリオがこんな風に仕上がるのか、という驚きというよりも意外性である。そうして瞬く間に引き込まれていった。

この映画は太秦商店街の人々を中心に動いていくのだが、その中に若い研究者榎大地が異分子のように入り込んで来て、ちよつとした波紋を広げる。その大地の言動の中に白川学がいくらか入っている。無論、これは学術映画ではないから、厳密な意味での白川学を説明するわけではないが、白川学に傾倒し入れ込んだ若い研究者が口にしそうな台詞として入っている。また白川先生の勉強の仕方的一端を示すような場面もさ

りげなく入っている。

映画の準備は二年前から少しずつ始められ、去年の春頃からストーリーの骨子が固まっていた。その中に白川文字学を研究する若い研究者が登場する設定になっているということで、映像学部から協力を求められた。それには山田洋次監督の指示があったそうだが、ここから映画と私との関係が始まる。六月中旬頃、映像学部の学生四人が富田美香先生と一緒に、われわれ白川研究所の研究員の前に現われた。上記の若い研究者を映画の中でどのように描き出せばいいだろうか、白川静ってどんな人だったのか、白川学ってどういうものなのかと、謎をいっぱい抱えて様々な質問をぶつけてきた。質問の内容は、まだ学問の世界をあまり知らない学生らしいものが多く、苦笑してしまうことも多かったが、彼らが一所懸命考えてきた質問に、こちらも一所懸命答えた。ただ一時間少々では時間が足りず、後日また改めて質問したいとのことであった。

それから一週間後、二回目のヒアリングが設定された。今度は松竹の制作スタッフが中心で、そこに映像学部の学生や富田先生も同席する形である。研究員としては私一人が立ち会うことになった。松竹側の出席者は、山本一郎プロデューサー、阿部勉監督、佐々江智明脚本担当の三方であった。私は質問される側であるが、私からすると、白川先生の学問が一般の人にどのように理解され、受けとめられているかということを知るのに良い機会でもある。

当時大変な売れ行きを示していた、松岡正剛氏の『白川静——漢字の世界観』を松竹のスタッフはすでに読んでいた。松岡正剛氏は白川先生のエッセイストとしての才能を見つけた人であるが、エッセイや一般書を書かれる時の白川先生と、学術論文を書かれる時の先生とはかなり執筆の姿勢が違う。白川先生の学術論文は論証部分が非常に重要な位置を占めている。むしろ一般書でも論証の一端が示されているので、凄い学者であることは感得できるだろうが、先生独特の表現やレトリックの

魅力が前面に出てくるような書き方になっている。それに魅了されて愛読者になっていく人も少なくないように思われる。「文字の呪能」という語などはその最たるものであろう。しかしそうしたスーパースター白川静について話したところで映画の中に生かすことはできない。白川静に焦点を当てた映画ではなく、白川学を勉強する研究者を登場させる映画だからである。必要なことは研究生活の一端を描き出すための具体的な細部である。それで私の知る限りでの白川先生の具体的な勉強の仕方を、私自身の経験や方法も交えながらかなり具体的に話したのである。いわば内から見た白川静である。

有名な甲骨文のトレースのこと。甲骨金文を解読するために行なわれた徹底的な語彙分析の具体的な方法。そのために用いられた語彙カード。文字分類カード等々。それでも具体的な方法でいま一つ分らない所が残っているとのことで、後日映像学部の学生で監督助手を務めていた古寺綾香さんが二回ほどやってきた。また、電子メールでも何回かの質疑応答を交わした。トレースに使うのはどのような紙か？ どういうペンを使えばいいのか？ カードを整理する時はどのように整理するのか？ カードは何に入れるのか？ どのような書式で書けばいいのか？ 語彙カードはどのような大きさにすればいいのか？ どのような紙を使うのか？ 実に念入りな質問で、ひよっとして彼女自身が今から文字学の勉強を始めるのではないかと思えるような熱心さであった。

後日聞いたところによると、名刺大のカードをプラスチックの名刺整理ケース（奥行き約三十センチ）ケース一杯になるほど作ったという。本格的である。それだけやっておけば、榎大地のイメージが研究者らしくなってくる。榎大地役の田中壮太郎さんも一緒に楽しんでみながらカード作りやトレースの練習をしたそうである。ざる蕎麦の場面では『金文通釈』本文篇を見ながら語彙カードを書いていたり、詩を作っている場面では『甲骨文合集』のトレースが見えたりしている。ちらっと目に

入ってくる程度であるから、大部分の人には見落とされそうであるが、白川文字学の研究者の雰囲気は自然に醸し出されているはずである。もつとも、映画の中では恋する青年であるから、そちらの印象に圧倒されてしまうかも知れないが。

蛇足になるが、私自身も飛び入りみたいな感じで映画の中に突然出てくる。一分前後の場面であるが、この場面の撮影には二時間ほどかかっている。その場面に最も相応しい雰囲気になってくるのを待つといった呼吸で撮影されているのだと感じた。



語彙カードを準備する田中壮太郎氏とスタッフ

©松竹株式会社

# 二〇〇九年度 文化事業活動報告

文化事業担当 久保 裕之

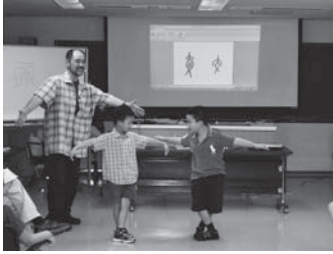
白川研文化事業運営委員会では、研究所設立の五年目にあたる二〇〇九年度には、二〇〇八年度に引き続き、白川文字学の一般への普及と、ネットワーク作りに重点を置いて、以下の活動を展開した。

## 「体験型漢字講座」「漢字探検隊」

二〇〇七年度より始まった「漢字探検隊」は、毎回一つのをテーマとして、座学だけではなく、見学や体験を通して漢字の成り立ちとそのもとになった自然や文化を学習する体験型の講座である。本年度の実施講座は以下の通り。



ふるさと漢字探検隊  
(宮城県角田市2009年5月)



漢字ジェスチャー大会  
(名古屋科学館2009年7月)

小倉	広島	神 戸			名古屋		宮城	東 京				京 都				地 域	
2	2	3	2	1	2	1	1	9	8	7	6	19	18	17	16	15	回
2009・12	2009・5	2010・3	2009・12	2009・8	2009・10	2009・7	2010・5	2010・2	2010・1	2009・11	2009・9	2010・3	2010・1	2009・10	2009・8	2009・5	実施年月
動物	動物	道具	酒造り	人体	建物	人体	農業	神	人体	科学	天体	—	学校	人体	戦争と平和	動物	テーマ
動物漢字探検隊	動物園で漢字と出会う	道具と漢字	酒あれば幸福	漢字ジェスチャー大会	名古屋城で漢字三昧	漢字ジェスチャー大会	田んぼで漢字と出会う	神様とつながる漢字	漢字で遊ぼう	科学と漢字	漢字探検隊、宇宙へ	漢字あそび大会	学校で漢字を見つげよう	漢字ジェスチャー大会	戦争と平和の漢字	動物園で漢字と出会う	講座名
12	29	4	5	0	8	15	15	16	55	15	140	52	30	15	59	47	参加者数
14	22	3	1	13	4	15	17	19	25	18	160	43	32	23	39	27	大人子供
到津の森公園	広島市安佐動物公園	神戸市立博物館	白鶴酒造資料館	こーぷこーべ生活文化センター	名古屋城	名古屋科学館	角田市一円	湯島天満宮	ふくい南青山291	国立科学館	文京シビックホール	立命館大学	京都市学校歴史博物館	立命館大学	立命館大学	京都市動物園	場所



本年度はすでに実施している京都・東京・神戸・広島・小倉に加え、新たに宮城と名古屋が加わり、全国的な広がりを見せ、延べ千人ほどの参加者があった。宮城では「東京漢字探検隊」の主催により、東京在住の親子が一泊二日で同県角田市を訪問、文化財や宇宙センターを見学したのち、田植えを体験する企画で、一日講座であった「漢字探検隊」に新たな試みが加わった。また名古屋と神戸での開催は、それぞれ中日文化センター・コープこうべ生活文化センターとの共催である。地元を代表するカルチャースクールとの共催は、大学と社会との連携を目指したものである。



酒あれば幸福  
(2009年12月 神戸市・白鶴酒造資料館)



名古屋城で漢字三昧  
(2009年10月 名古屋城)



道具と漢字  
(2010年3月 神戸市立博物館)



科学と漢字  
(2009年11月 東京・国立科学館)

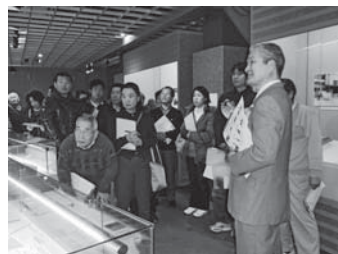
二〇〇九年八月には、立命館大学国際平和ミュージアムとの共催により「戦争と平和の漢字」についてワークショップを開催、戦争から生まれた漢字について学んだ。同年九月末には、名古屋で開催された全国校友大会のプレ・イベント会場にブースを開設、白川学の出展を行った。同年十月下旬から十一月初旬の一週間には、同じく国際平和ミュージアムとの連携で平和と言葉について考え、表現しようという催し「平和ってなに色 文字・活字文化の日特別企画」を本年も開催した。平和への願いを一字で表すコーナーを設け、参加者には虹の七色等の漢字について解説したカードをプレゼントした。

また同じ時期には、東京・国立博物館で子どもを対象にした「大学サイエンス・フェスタ」が開かれ、立命館大学ブースに白川学に関する出展を行った。

#### 学内他組織との連携事業



漢字あそび大会  
(2010年1月 東京・ふくい南青山291)



学校で漢字を見つけよう  
(2010年1月 京都市学校歴史博物館)

## カルチャースクールとの共催

名古屋の中日文化センターにおいて、二〇〇九年四月から九月および十月から二〇一〇年三月にかけて、「白川静と東洋文字文化の世界」をテーマに出講した。また、先述の「漢字探検隊」のうち、名古屋と神戸での開催講座は、それぞれ中日文化センターおよびコープこうべ生活文化センターとの共催であった。

## 福井県との連携

福井県での公立小学校全校で「白川文字学」を学習する取り組みは二年目を迎えている。また郷土の偉人の業績を展示する「福井県立こども歴史文化館」が二〇〇九年十一月に開館、白川研から展示についてのアドバイスを行い、展示品数点を貸与した。

二〇一〇年一月には、白川静を「ブランド」として首都圏で売り出す



全国校友大会イベントへの出展  
(2009年10月 名古屋市もちの木広場)

べく、東京で白川研と福井県、文京教育サポーターズとの共催による「生誕一〇〇年記念講演会」を開催、東京での初めての一般向け講座となった。

同月京都で行われた『京都太秦物語』の試写会には福井県から副知事が来場。県のバックアップにより、二〇一〇年内の福井市での公開が予定されている。

五月十八日には立命館大学に西川一誠県知事が来訪。衣笠図書館で開催中の「白川静文庫開設記念展」を観覧された後、政策科学部主催の「知事リレー講義」に出講され、県の教育政策の一つとして、白川文字学に基づく漢字教材の制作などを述べられた。



白川静生誕100年記念講演会  
(2010年1月 東京・南青山291)



白川静文庫開設記念展を観覧する西川知事



「知事リレー講義」で講演する西川知事

白川文字学の普及者とのネットワーク構築

全国で白川文字学の普及に努力されている教員や漢字研究者とのネットワーク作りは二年目を迎え、ネットワーク相互間での連携が行われるようになった。

①学力の基礎をきたえどの子も伸ばす研究会（学力研：小学校教員を中心とした自主学習組織。ここでの実践から「百マス計算」などが生まれた）二〇〇九年八月の全国大会での発表を行った。同月、同研究会の「漢字部会」メンバーによる漢字学習についての講演会を開催。全国からの参加者があった。



福井県立子ども歴史文化館



学力研漢字部会講座 (2009年8月 大阪市内)

- ②出張講座：兵庫県加古郡稲見町立母里小学校の特別授業および広島県尾道市立土堂小学校PTA主催の親子講座に招かれた。
  - ③伊東信夫氏（漢字研究者。『漢字が楽しくなるシリーズ』（太郎次郎社エディタス刊）や『成り立ちで知る漢字のおもしろ世界シリーズ』（スリーエーネットワーク刊）の著者）を「学力研漢字部会講座」や「京都漢字探検隊―漢字あそび大会」に招き、講演などを行った。
  - ④近年「白川文字学」関連の書籍を刊行している出版社（平凡社、太郎次郎社エディタス、スリーエーネットワーク、方丈堂出版）との間で、講座での広告配布や「漢字あそび大会」での景品提供など相互連携がなされている。
- 二〇一〇年度は、白川静生誕百周年である。社会の注目をますます浴びることになるこの年に、さまざま宣伝活動を行い、また各地との結びつきを深めて、全国規模での普及を図っていくこととしたい。



## 二〇〇九年度 学術活動報告

副研究所長 芳村 弘道

「立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要」第四号の発刊

当研究所の研究誌「立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要」第四号が二〇一〇年三月に刊行された。所収内容は次のとおり。

### 研究員の主な研究活動

#### ○加地 伸行

著書 『史記』再説―司馬遷の世界』（中央公論新社 二〇一〇年一月）

著書 『論語増補版』（講談社学術文庫）（講談社 二〇〇九年九月）

著書 『論語』再説（中公文庫）（中央公論新社 二〇〇九年三月）

#### ○芳村 弘道

論文 「留滬半年経眼書録抄（下）」（『學林』第五〇号 中国藝文研究会、二〇一〇年一月）

#### ○萩原 正樹

著書 『詞学の用語―「詞学名詞釈義」訳注』（汲古書院 二〇一〇年三月）

論文 「日本の中国詞学研究及新進展」（長沙理工大学学報（社会科学版）第二四卷第三期 二〇〇九年九月）

#### ○本田 治

研究発表 「宋代餘姚の水利開発補論」（中国水利史学会大会、於明石市アスピア明石、二〇〇九年十一月一日）

論文 「宋代明州の移住と開発」『日本宋代史研究者論文集』第四卷「宋代寧紹地域の社会と文化」（河南大学出版社 近日刊行予定）

#### ○高島 敏夫

論文 「春秋時代における『天命』と『大命』」  
―『天令（命）』『大令（命）』の意義變遷が示すもの（二）―  
（『學林』第四十九号 二〇〇九年三月）

論文 「讀『釈史』」（『立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要』

第三号 二〇〇九年三月）

### 論 文

讀「作册考」……………高島敏夫 1

―（白川文字學の原點に還る）（三）―

中国から見た白川文字学……………張 莉 17

―白冰著『青銅器銘文研究―白川静金文著者の成就與疏失』について―

### 研究ノート

銀雀山漢簡殘簡について……………石井真美子 37

國內所見詞譜異同表……………萩原正樹 49

### 翻 訳

「字統の編集について」 白川静著……………クリストフ B・シユミッツ 1

## 編集後記

○今年には故白川静名誉所長の生誕百周年に当たり、当研究所は、記念の事業を実施しています。その内容について記されたのが、小誌冒頭の加地伸行所長「今年度の事業報告」です。この一文を通して、学内だけに止まらず、広く学外、一般社会に向け、学術事業と文化事業の両面にわたって意欲的な活動を展開する当研究所の取り組みをよく理解いただけると幸いです。

○このたび「白川静文庫」が衣笠キャンパス図書館に開設されました。これを記念して、「白川静文庫開設記念展」が図書館一階で開催中です。初日の五月一日には、白川静先生御遺族の津崎幸博氏の御臨席を得て開式が行われました。自筆原稿、著書、写真パネルなどをもって構成し、白川先生の学問と生涯を知っていただけるように展示しました。六月二十四日までの開催です。多くの方に御覧いただけると幸いです。

○「白川静文庫」開設にあわせて、本学図書館から「白川静文庫目録」が刊行されました。「白川静文庫の開設と『白川静文庫目録』の完成」は、文庫開設までの経緯ならびに膨大な数の書籍・資料類の所蔵から漢籍と自筆原稿・ノートの一部を紹介したものです。

○萩原正樹研究員の「特殊講義『白川学の世界』の開講について」は、昨年度から始まった衣笠キャンパス全学部共通の講義「白川学の世界」(前期開講科目)の紹介です。白川先生の教えを受けた複数の教員が担当し、それぞれの専門分野から「白川学」の特色を分かりやすく講義するという授業内容です。今年からは大学コンソーシアム京都の開講科目となり、他大学の受講生も加わって毎水曜日の第五時限に講義が行われています。

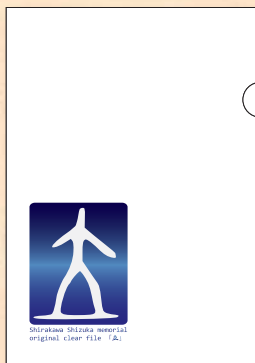
○本学映像学部と松竹株式会社との共同制作、山田洋次監督(本学客員教授)と阿部勉監督の共同監督によって、本年一月に映画『京都太秦物語』が完成しました。その制作に当研究所も協力いたしました。『京都太秦物語』制作談 白川文字学研究者 榎大地の創造」は、この映画制作に携われた本学映像学部の富田美香先生にご寄稿を願ったものです。この映画の重要人物が最終的に白川文字学の研究者に設定された制作秘話を明かしていただき、はなはだ興味深く思われます。御多忙の中、ご執筆下さった富田先生にこの場を借りて感謝申し上げます。

○高島敏夫研究員もこの映画に関して「『京都太秦物語』と白川学」を寄稿しています。映画に重要な役割を果たす榎大地の白川文字学研究者という人物像づくりに協力した中で印象にのこった事柄が書かれています。白川文字学研究者という人間を描き出すために、俳優さんのみならず、学生諸君までもが甲骨文字のトレースや資料カードの整理を実際に行うという努力の結果、映画が完成したことも分かり、感銘を受けました。この映画は、「人を学ぶ」(富田先生の文中の語)ことができる本当にいい作品だと思います。是非、ご鑑賞下さい。

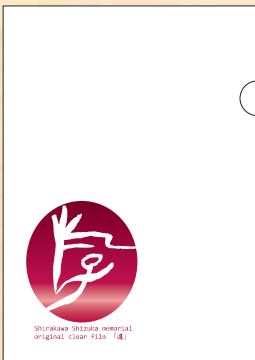
○久保裕之「二〇〇九年度 文化事業の活動報告」には、京都だけでなく、東京・宮城県角田市・名古屋・神戸・広島・小倉の各地で実施された体験型漢字講座「漢字探検隊」が主に紹介されています。「漢字探検隊」は、開始から三年を経て全国規模に発展し、白川文字学の普及が進んでいることを知っていただいたく思います。

(芳村弘道記)

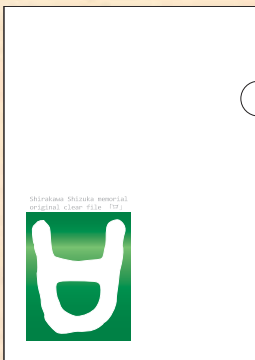
白川静オリジナルクリア  
ファイルができました。  
立命館大学生協(衣笠)で  
数量限定発売中。  
3枚組**350円**



立命館「立」の甲骨文。



白川先生がお好きな文字「遊」の金文。



白川先生が発見された「ヒ(サイ)」。